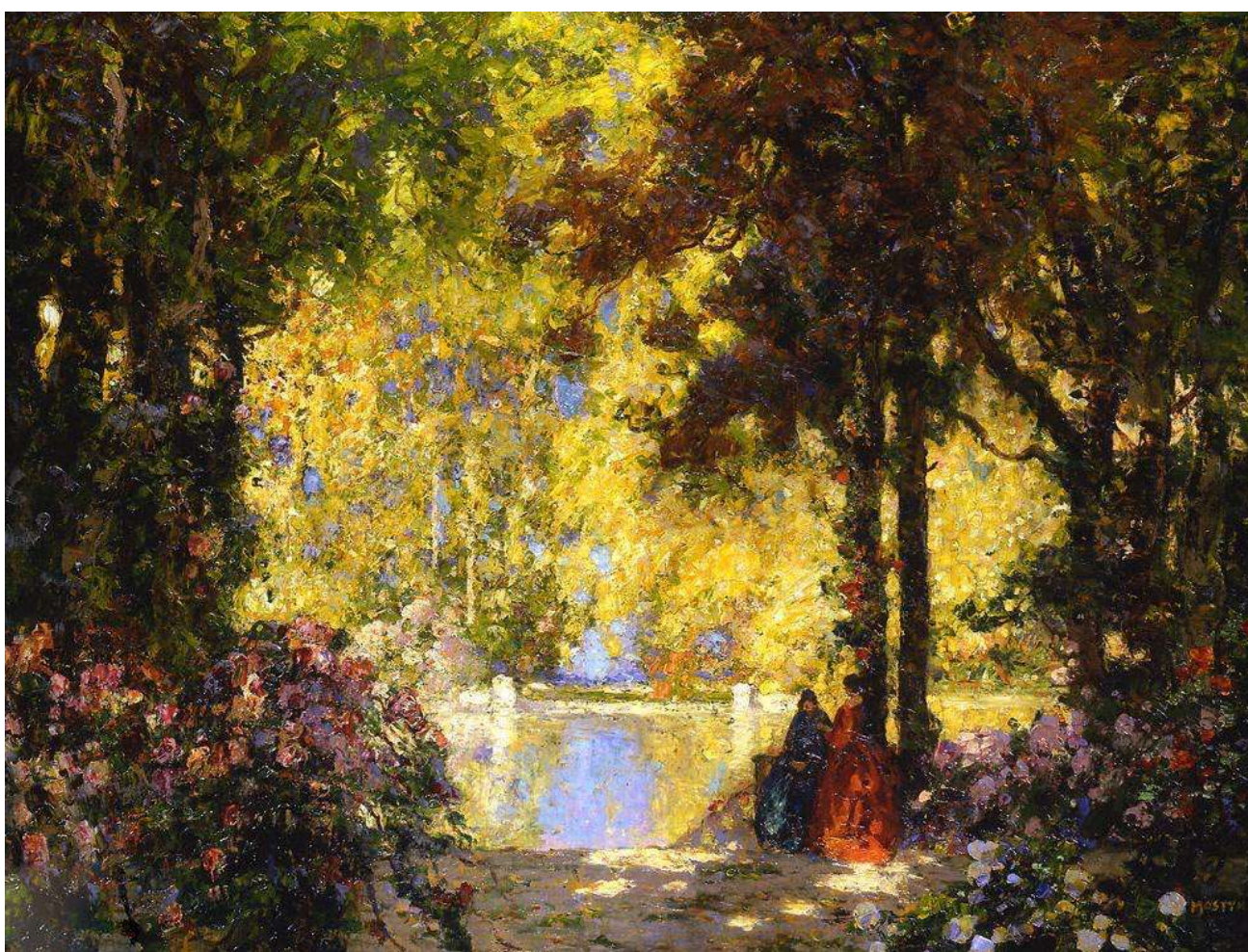

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 194

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3861. 催眠術にかけられる夢
- 3862. 不思議な夢と可笑しい夢
- 3863. つぼみと建設中の建物より
- 3864. 建築と作曲: つぼみから教わる内在的な発達運動
- 3865. 永遠の実践者: 曲の生成プロセスと人間の発達プロセス
- 3866. 心が動かされることと治癒
- 3867. 今朝方の夢の続き
- 3868. 作曲家の人生史及び思想の探究: 音楽と時間
- 3869. 今頃気づく諸々の事柄
- 3870. 暗号通貨に関する夢
- 3871. 夢の続き: 言葉に内包されるもの
- 3872. 進歩・発達の運動性: 身体意識の涵養
- 3873. パリとの再会の日に向けて
- 3874. 固有の体験とそれを綴ること
- 3875. パリ小旅行計画
- 3876. 大伽藍の建設に向けて
- 3877. 敬虔に生きること
- 3878. 今朝方の夢の断片
- 3879. 自発的な形象化運動
- 3880. 自分自身を読み解くことと書くこと

3861. 催眠術にかけられる夢

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える頃に一日の活動を始めた。辺りはまだ闇に包まれている。だが、ここ最近日は日が昇り始めるのがめっきり早くなり、七時過ぎには徐々に明るくなってくるだろう。起床直後に天気予報を確認すると、今日は午前中に小雨が降るようだが、午後からは晴れるらしい。天候を見て、今日も近所のサイクリングロードに散歩に出かけたい。

昨年の記事を読み返してみたとき、三月初旬にも最高気温がマイナスに近づくような日が何日かあった。これから一週間ほど、最高気温は高い日が続くが、最低気温は零度に近い。最低気温に関しては、一瞬冬に戻ってしまうかのようだ。

来週の木曜日から数日間滞在するパリの天気を確認してみると、パリは随分と暖かい。一足先に春がやってきたかのような天候になっている。パリに滞在中は、一日に一つだけ訪れたい場所に足を運び、後の時間はゆっくりしたいと思う。二年半ぶりのパリが楽しみだ。

いつものように、今朝方の夢についてまず振り返っておきたい。夢の中で私は、日本のどこかの駅のプラットフォームにいた。列車を待っていると、小中学校時代の友人が続々とプラットフォームに姿を見せ、私は彼らとの再会を喜び、その場でしばらく話をしていた。すると、その場にいた七、八名の友人たちと共に瞬間移動し、私たちは草原の上にあった。その草原には、なぜだか何人かが同時に腰掛けられるような椅子と、小さなちゃぶ台が置かれていた。とりあえず私たちは、先ほどの話の続きをすることにした。

すると突然、私たちの背後から誰かが近づいてくるような気配があった。私は後ろを振り返ると、数メートル先に、ジョン・エフ・ケネディ大学時代のレバノン人の友人がいて、彼女は走って私の方に向かってきた。なぜか彼女は笑みを浮かべながら、猛烈な勢いでこちらに向かってきて、挨拶をするよりも先に、彼女は私のおでこに手を当てた。すると私の意識は一気に飛び、椅子から崩れ落ちて、地面に倒れ込んだ。

おでこに手を当てられ、意識が飛ぶ瞬間に、「催眠術にかけられた」と私は気付いた。地面に横たわると、意識が全く無い深い意識の層に降りていったが、数秒後に私は、自分が無意識の深い層に降りて行ったことに気づき、一気に目を覚ました。目覚めて開口一番、「強固な自我が無いと催眠

眠術にはすぐにかかってしまうね」と述べた。私がそのように述べたとき、催眠術をかけた彼女はもうその場におらず、友人たちだけがぼかんとした表情を浮かべながら私の方を見ていた。

もしかしたら私はまだ催眠術にかかったままなのかと思い、自分の左手の手のひらを眺めると、先ほどの駅のプラットフォームにいた。そこでは、小中学校時代の友人(KM)と出会い、彼はなぜだか、頭皮の状態を見て欲しいと私にお願いをしてきた。

私は頭皮に関する知識を持っていないのだが、彼の頭皮をチェックすることにした。すると、随分と頭皮が痛んでいるようであり、髪の毛が随分とやせ細っているように思えた。そこで夢の場面が変わった。

今朝方はまずそのような夢を見ていた。とりわけ、催眠術にかけられた場面が印象に残っている。夢の中で、レバノン人の友人が出てきたことは初めてであったし、催眠術にかけられたことも初めてであった。以前の夢の中で、シャーマンと遭遇し、シャーマニズムに固有の意識変容技法によって意識が変容していく体験を何度かしたことがあるが、催眠術は今回が初めての体験である。

今回は、全く有無を言わずに、いきなり催眠術をかけられ、意識がなくなり、深い意識の層に降りて行ったことが印象的だ。確かにそこから数秒ほどそうした意識の層に留まっていたが、そこからハッと再び夢見の意識状態に戻ったことは興味深い。このように、夢を見ている状態の中で、さらに深い意識の層に降りていくような現象は、ここ数年になって見られることだと思う。具体的には、欧州での生活を始めてからこの現象が見られるようになったと述べて間違い無いだろう。

夢を見ている最中に、自覚的に夢を見ない深い意識の層に降りていく体験と、そこから再び夢見の意識状態に戻るとい体験は、何を示しているのだろうか。意識の様々な階層を行き来している自分がいる。フローニンゲン:2019/2/21(木)06:50

No.1705: The Other Side of Winter

I'll go to bed shortly, imagining the other side of winter. Groningen, 21:13, Thursday, 2/21/2019

3862. 不思議な夢と可笑しい夢

時刻は午前七時を迎え、空がダークブルーに変わり始めている。赤レンガの家々のシルエットだけが何となく見える中、通りを挟んで向こう側の住宅地に、工事用のトラックが二台ほど、ピカピカと明かりを点滅させながらゆっくりと進んでいる。

先ほど振り返っていた今朝方の夢について再度思い返してみると、意識には様々な階層が存在しており、それぞれの階層によって開示されるリアリティが異なることは大変興味深いと改めて思った。今のところ、夢を見ない深い意識状態の中では自己意識を維持することはできず、それは完全に意識の中に溶解してしまう。今後は、深い意識状態の中でも気づきの意識を保つことができるだろうか。そのようなことを考える。

今朝方の夢にはまだ続きがあり、それらについても振り返っておきたい。夢の中で私は、見覚えのない一軒家にいた。その家の一室はとでも広々としており、勉強机が四つほど四隅に置かれていた。どうやらそのうちの一つは私の机らしく、自分のだと思われる机の方に向かった。すると奇妙なことに、机の上、そして引き出しの中に大量の砂があった。さらには、筆箱の中や名刺入れの中にも砂が大量に入っている。

私は、名刺入れの中から何枚かの名刺を抜き出し、砂を取り出した。砂を取り出すことが目的だったのだが、取り出した名刺に記載されている方々が今元気にやっているだろうかと気になった。取り出した名刺は色は異なれど、全て同じデザインであったから、彼らは同じ会社に所属しているのだろう。そのようなことを思った瞬間に、部屋の壁が消え、そこには四つの机だけが残った。そして、四つの机を対角線で結んだところの交点に、砂場があった。私はなぜだか、手持ちの細長いカバンに砂を詰め、それを机の近くまで運んだ。そのようなことをしていると、夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は屋外のフットサルコートにいた。周りを見渡すと、そこには大学時代のフットサルサークルのメンバーがいて、どうやらこれから試合が行われるようだった。親しくさせてもらっていた一学年上のキャプテンを務める先輩が、スターティングメンバーを発表し始めた。その先輩がこの試合にかける意気込みは相当なものであり、かなり真剣な顔でメンバー発表をし始めた。

最初に私の名前が呼ばれ、1番と4番のポジションのどちらがいいか？と尋ねられた。1番は仲間ボールを配給する役割が強く、4番はゴール前でポストプレーをする役割が強いということを出しながら、私は1番のポジションをお願いした。すると先輩は、「本当に1番のポジションで大丈夫？」というような表情を浮かべたが、とりあえず1番のポジションを任せてもらえることになった。その後、私たちの学年のメンバーであり運動神経が良くない友人が名前を呼ばれ、先輩は彼にもポジションを尋ねた。するとその友人は、「桂馬のさらに右斜めのポジションで」と真顔で述べた。それを聞いた一同は、全員爆笑した。

もちろん、フットサルにおいてそのようなポジションはないのだが、彼の説明によると、通常の右サイドのポジションよりもさらに斜めに深くポジションを取ることを指しているようだった。端的には、右サイドのラインを超えて、初期のポジショニングはラインの外に出ているというようなものだった。私はそこで、「バスケでいうアイソレーション？」と彼に尋ねた。すると彼は、「そう」と一言だけぶっきらぼうに述べた。

すると一同は、またしても笑った。ただし、今回は爆笑とまではいかず、少し控えめに笑い、それは幾分苦笑いでもあった。というのも、バスケにおいてアイソレーションのポジションを採用するためには、その選手は基本的に絶対的な得点力を持っており、エースである必要があるからだ。一方、そのポジションを申し出た彼は、ロボットのなカクカクとした動きを特徴とする、運動神経が欠落している典型的な選手であった。

そうした事情が私たちに苦笑いをもたらした。メンバー発表をしていたキャプテンも、彼の申し出によって随分と表情がほぐれており、とりあえず私たちは、面白そうなので、「桂馬のさらに右斜めのアイソレーション的なポジション」を彼にらせてみることにした。フローニンゲン:2019/2/21(木)07:22

3863. つぼみと建設中の建物より

早朝の作曲実践をしている最中、思い出がやわらかい流れに乗って、自分の内側をゆったり動いている感じがしていた。欧州での生活が進行していけばいくほどに、やたらとこうした感覚が生まれる。自分の内側の時間の流れが変容し続けており、それを確かに実感している自分がいる。

昨日、夕方に散歩をしていると、道端に植えられた枯れ木の枝の先につぼみが付いていた。私は思わずその場に立ち止まり、つぼみが付いている枝を撫でていた。心境として、自分のエネルギーをその枝に送り、つぼみが立派に開いてほしいという思いがあった。小さなつぼみが誕生している姿を見ると、春が近づいていることを改めて感じることができる。

自然の様子を観察し、自然を通じてこの世を生きていくこと。自然と波長を合わせて、調和のとれた落ち着いた生活をしていくこと。それをこれからも大切にしたい。

ここ最近はずっと暖かい日が続いているが、明日からの最低気温は幾分低くなる。冬が迷子になっていないことを願い、春に向けての足取りを着実に進めていることを祈る。

昨日散歩していたコースは、近所の河川敷のサイクリングロードである。しばらく前から、ちょうど踏み切りを渡った広い空き地に建物が建てられるようになった。それはまだ建設中であり、いつ頃完成するのかわからない。見たところ大きなマンションのように見える。

この建物が完成する頃には、おそらく私はもうフローニンゲンにいないのだろうと思う。私がある場にいなくても、進行していくものが無数にある。私たちの見ていないところで、人々は自らの仕事に従事し、生活を営んでいる。建設中の建物を眺めながら、そうしたことを思うと、どこか感慨深いものがある。

私がある場に立ち止まり、建物を熱心に眺めていたためか、自転車で通りかかる人たちも私の視線の先が気になったようであり、たいていの人は建物の方を一瞥していた。建設中の建物を眺めながら、建築における機能性と美との関係に関する問いが浮かんだ。

目の前の建物の作りは変わっており、特に屋根の傾斜が特徴的であった。おそらくそこには何らかの機能性が考慮されており、同時に、機能性だけを追求するのではなく、建物という一つの創造物の美的側面についても建築家は考えていたはずである。

建築家にとって、建物の機能性と美とはどういったものなのだろうか。そしてそれらはどのような関係を持っていると考えているのだろうか、ということに興味を湧いた。この論点は、芸術作品の機能性(あるいは実利的側面)と美との関係に関する話とも繋がってくる。

空が晴れわたり、早朝の太陽の光がやわらくフローニンゲンの街を包んでいる。夕方も天気が良いれば、建設中のその建物を眺めに散歩に出かけたい。フローニンゲン:2019/2/21(木)08:34

No.1706: A Winter Train for Spring

A winter train started to depart for spring. Groningen, 09:02, Friday, 2/22/2019

3864. 建築と作曲:つぼみから教わる内在的な発達運動

時刻は午後の五時を迎えた。早朝には晴れ間も見せていたが、天気予報の通り、午後からは霧のような小雨がぱらついていた。ちょうどランニング兼ウォーキングに出かけた際には小雨が止んでおり、今日も全身を適度に動かすことができた。今日もまた、昨日に引き続き、近所の建設中の建物をぼんやりと眺めていた。

ぼんやりと眺めているだけのはずだったが、色々と気づきが自発的に湧いてきた。例えば、昨日までの私は、自宅の方からその建設現場を見たときに見える一棟の建物しか見ておらず、実はその後ろには全く同じ建物が建設されていたという点である。見る角度を変えることによって新たなものが見えてくるというのは、世界認識の原理なのかもしれない。

後ろの建物をよくよく見てみると、それは前に立っている建物とシンメトリーをなしていた。二つの建物の屋根の傾斜が、M字型を作っていたのである。その様子を眺めながら、こうした建物の設計図を描く建築家の能力に改めて感銘を受け、その設計図通りに作業を進めていく作業員たちの能力に感銘を受けた。おそらく、私などが建物の設計図を描けば、ほぼ間違いなく構造上の問題が多々生まれるだろう。また仮に、私が作業員であれば、設計図通りに建築を進めることを怠ってしまう点などがあるだろう。そうしたことを総合的に考えてみた場合に、建築家と作業員の仕事の価値を知る。

なぜ私が、近所の建設中の建物を毎日観察してるのかよくわからない。強いてあげるならば、それは素朴に興味を持たせてくれるから、というのが理由になるだろうか。私としては、やはり建築と作曲を関連づけて考えてみたくなる。堅牢かつ緻密に構築された建物とベートーヴェンの曲について思いを馳せる。建築的な作曲という観点でいえば、バッハもまた偉大な作曲家であった。バッハやベー

トーヴェンの残した曲に建築美を見出し、そうした美を創出する方法について探究を続けていき
いと改めて思う。

河川敷のサイクリングロードを歩いている最中、昨日もふと立ち止まった箇所
で足を止めた。道の脇には、裸の木があり、よくよく見ると、枝にはつぼみ
が付いている。さすがに昨日とはそれほど変化していなかったが、おそ
らくもうしばらくすると、突然非線形的な発達が起こるのだと思う。そ
して、私の目には大きな発達は見られなくても、つぼみの内側には、絶
えず発達の方向に向かっていく内在的な運動がなされているのだとい
うことにも気づく。

そこからふと、発達の当事者と、その人を支える人たちの双方が、当
事者の内側で起こっている発達の運動にどれだけ気付けるかが大事だ
と思わされた。「発達が目に見えないから発達などしてない」とみな
してしまうのではなく、私たちの内側で絶えず行われている目には見
えない発達運動に光を当てること。それはとても大事なことだろう。

今日の散歩を通じて、着実に冬が終わりに向かっていることを再度
実感した。生命力に溢れる春に対する期待が膨らむ。フローニンゲン
:2019/2/21(木)17:29

No.1707: Our Journey

I often see those who excessively criticize others' activities. Perhaps, their responses are a kind of self-defense mechanism of their ego. Groningen, 15:22, Friday, 2/22/2019

3865. 永遠の実践者: 曲の生成プロセスと人間の発達プロセス

時刻は午後の七時半を過ぎ、これから一日が終わりに向かっていく。つい先ほどメールを確認したところ、携帯電話会社から、異動に関する手続きの連絡が届いていた。三月末は異動が多く、それを考慮してのメールであった。私もまた、三月末ではないが、この夏に生活地を変えようと思っている。今回のメールが届いたのは、その前触れのようなものであった。そうしたことを思うとき、人生の諸々の事柄において、出発の時刻が迫っているように感じる。いろいろなことが進行していき、そこには終わりもありながら、新たな始まりもある。新たなに始まったものは、結局新たな終わりとなり、それがまた新たな始まりを呼び込むことも興味深い。

夕方ふと、私は曲を分析・解説する者ではなくて、曲を作り続ける者でありたいという思いが自然と改めて湧いた。それは人間発達に関わる仕事についても同じだ。専門書を読み、発達現象を分析・解説する者ではなくて、発達現象に直接かかわっていく者であり続ける必要があると実感する。おそらく、永遠に実践者であることが自分にとっての生きがいなのであり、同時にそれを引き受けていくことが自分の役目なのだと思う。

作曲も、人間発達に関する仕事も、とにかく自分で直接体験を積むことが何よりも大切だ。前者に関しては、まさに曲を作ることが重要であり、後者に関しては、現在行っているように、様々な領域の方々と具体的な協働を進めていくことが重要になる。そうした直接体験のない分析・解説ほど寂しいものはない。

今日は夕方に、アルフレッド・マンのフーガの解説書“The Study of Fugue (1958)”を読み返していた。フーガに関する実験は、まだ本格的に始めていないが、近い将来には必ず、フーガの技法を習得するための鍛錬を始めたいと思う。これまではバッハのフーガを参考にすることがあったが、一切事前知識なしで、バッハの楽譜を見よう見まねで曲を作っていくことを行っていた。そうした手探りの実践をしながらも、上述のような書籍を気の向くままに読んでいく。

昨日の続きとして、今日もまた、作曲上のモチーフについて考えていた。作曲過程においてモチーフが生まれたら、それらを単に羅列していくのではなく、それぞれのモチーフを曲中の中で育むようにしていきたい。しかも、曲の進行に従って変化する文脈に沿う形で、有機的にモチーフを発展させていく。言い換えると、曲の有機性、ないしは曲が曲自身を育てていくという有機的展開性を大切にしていく。

モチーフの自発的な発達について考えを巡らせると、音楽は、絵画と同様に、純粋な生命表現なのだということが見えてくる。昨日述べていた形式との関係性はここにあるかもしれない。つまり、形式の学習は、曲の命であるモチーフをどのように育むのかに関するものである可能性が見えてきた。生まれ出てこようとする曲に最適な形式を選び、ないしは形式そのものを曲の特性に合わせて変えていくことによって、曲という生命を育てていく。時々、モチーフのことを「細胞」に喩えている表記を見かけていたのは、上記のような事情によるものなのだろう。モチーフ一つ一つには命が宿っているということ、そしてそれは形式を器とみなしながら、それとの相互作用によって、有機的に発展して

いく。曲を命と見立てれば、曲の生成プロセスと人間の発達プロセスが非常に近いものであることがわかる。フローニンゲン:2019/2/21(木)19:59

No.1708: Blue Byzantine

I went to the center of the city for shopping. I stopped by a cosmetic store to purchase a new perfume. I bought one whose name is “Bleu Byzantine (Blue Byzantine in English).” The scent of the perfume made me create a new piece of music. Groningen, 18:11, Friday, 2/22/2019

3866. 心が動かされることと治癒

今朝は五時半過ぎに起床し、六時を迎えてしばらく経ってから、一日の活動をゆっくりと始めた。

小鳥たちの歌声が闇の世界にこだましている。小鳥たちの澄み渡る声に耳を傾けていると、意識が深まっていくのみならず、意識が大いにくつろぎ、何か治癒的な作用を実感する。意識の深まり、そして意識をくつろがせることには治癒的な作用があるようだ。

今日は晴れのようなから、午後には行きつけのチーズ家に行き、街の中心部の化粧品屋で洗顔類などを購入しようと思う。今日は、近所の河川敷のサイクリングロードに行くのではなく、その代わりに、街の中心部に行く散歩を楽しみたいと思う。

本日の活動を本格的に始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。今朝方は、いくつかの夢を見ており、幾分記憶は断片的だが、できるだけ夢の内容を思い出してみたい。

夢の中で私は、現在進められているプロジェクトの協働者の男性と話をしていた。話の内容は、その方が作ってくださった資料に関するものだった。その方はまだ若く、これから実務経験を積んでいこうとされておられるが、いただいた資料の出来が非常に良く、私は感銘を受けていた。それを本人に直接伝えていたところ、その仕事ぶりに改めて感激し、話しながら私は涙を流していた。

私自身もなぜ涙が流れてきたのか不思議ではあったが、その方はもっと驚いたことだろう。私が話し終わると、その方はこれからの仕事をさらに意欲的に取り組んでいきたいということを述べていた。

そこで一度目を覚ました。目を開けてみると、夢の中の自分のみならず、夢を見ていた現実世界の自分自身もうっすらと涙を流しているようだった。

夢の世界で涙を流すという現象は時々経験する。現実世界において、涙を流す理由というのは色々なものが考えられるが、夢の中の世界では基本的に、感動の涙を流すことが多い。上記の夢もまさにそうだ。他者が懸命に行った仕事に対して感動の涙を流すこと。その背景には、一人一人の人間が行う仕事の尊さに対する敬意や、そうした仕事を生み出している各人の固有の魂に対する畏敬の念があるのかもしれない。

今回の件で改めて、涙を流すことには浄化作用、あるいは治癒的な作用があることを実感した。冒頭で小鳥の鳴き声に癒されるということを書き留めたが、それとも関係がありそうだ。

今この瞬間にもまだ聞こえてくる小鳥たちの鳴き声に耳を傾けてみると、まず心にゆとりという空間が生まれる。そこに自己の芯が休まり、それと同時に、芯が心地よく動かされる。心が動かされるといのは、こうした状態のことを言うのかもしれない。そのようなことを考えてみると、自分の心を動かされるということには、治癒的な作用が内包されている可能性があるのではないかということが見えてくる。

心が心地よく動かされ、適度な揺らぎがもたらされることによって、私たちの心は癒されていくものなのかもしれない。やはり、日々心の中にゆとりを持たせ、日常の何気ない出来事に対して心を動かされることは、自らの心を癒しながら育んでいくという点において大切なことなのだろう。フローニンゲン:2019/2/22(金)06:45

No.1709: An Arising Flow

Various feelings arise inside of me, which generate a flow. Groningen, 09:57, Saturday, 2/23/2019

3867. 今朝方の夢の続き

今日はいよいよ平日最後の金曜日を迎え、明日からは週末に入る。今日の午前中に一件ほど、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあり、明日の午後には別件でオンラインミーティングが一つ入っている。自らに与えられた役割を緩やかに全うしながら日々が過ぎていく。

昨夜の就寝前にふと、この六年間で協働させていただいた様々な方たちの顔が脳裏に浮かんだ。現在の自己を形作っている重要な要素の一つとして、この六年間で多様な領域の様々な方たちと協働をしてきたことを挙げるができるだろう。

ある時期から私は、専門書や論文を読むという探究活動だけを行っていくことに疑問を持ち、そうした探究活動に並行して、様々な方たちとの協働を通じた実践活動を大切にしてきた。おそらく、こうした実践活動の中に、社会とのつながりの感覚が存在しており、そうした感覚を持ちながら自己を深め、深められていく自己を持って、再び社会に関与していくことが、社会的な生き物である人間として生きていく上で大切になるのだろう。

昨夜はそのようなことを考えながら就寝に向かっていた。とにかくもう一度ここで、単に書物を読むということだけでは知識も技術も高まらず、真の意味で自己が涵養されることもないということを確認しておこうと思う。確かに、今の私は、書物を衝動的に読むということはなくなったが、それでもそうした方向に傾きがちな性質を持っていることは否定できないため、再度上記の点を確認しておきたい。

一日分のコーヒーが完成したところで、今朝方の夢の続きについても振り返っておきたい。夢の中で私は、これから日本を出発し、どこかの国に飛行機で向かおうとしていた。ちょうど私は空港に着いたようであり、これからチェックインカウンターに向かおうとしていた。ただし、その空港は作りが変わっており、それは空港というよりも、どこかショッピングセンターのようであった。

ショッピングセンターと空港の複合施設だったと述べた方が正確かもしれない。私はなぜだか、スーツケースを三つも持参しており、手荷物としての一つの絵画作品も加えると、かなりの荷物があった。そのため、チェックインカウンターに向かうためのエスカレーターに乗るのも一苦勞であり、私の前にいた二人の中年女性に荷物が当たらないように配慮しながら、エスカレーターで上の階に向かっていた。上の階に到着し、一步を踏み出した瞬間に、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はオフィスの中にいた。そのオフィスは特に見覚えはないのだが、どうやら私はそこで働いているか、コンサルタントなどの外部の者としてそこを訪問しているようだった。フロア内のトイレに向かおうとしていると、前方の曲がり角から見知らぬ外国人が現れ、突然私に日本語で挨拶をしてきた。それはとても丁寧な挨拶であり、同時に彼は、名刺を差し出してきた。名刺の

渡し方に関しても、まさに日本の企業社会の慣行をわきまえたものであり、私はそれに驚いた。その場において、日本人であるはずの私の方は、改めて名刺の渡し方をその人から学んだように思った。

その方が名刺を差し出した時、本来であればこちらの名刺も差し出す必要があると思うが、もはや名刺など持ち歩かなくなっていることと、その方の挨拶が突然だったこともあり、一瞬戸惑いながらも、その方の名刺をとりあえず受け取った。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2019/2/22(金)07:10

No.1710: A Mass of Energy

The weather is very fine today. I have a feeling that a mass of energy is moving inside of me.

Groningen, 12:02, Saturday, 2/23/2019

3868. 作曲家の人生史及び思想の探究: 音楽と時間

時刻は午前九時半を迎えた。今この瞬間のフローニンゲンの空は、うっすらとした雲に覆われている。そんな空の下を、一羽のカモメが飛び去っていく姿が見える。天気予報を見る限りでは、今日は一日中曇りのようだ。

先ほど、早朝の作曲実践を終え、ハーモニーに関する書籍を少しばかり読み進めていた。音楽理論や作曲理論に関する書籍を読み際には、そこに記載されている事柄を、今後の作曲実践でいかに活用していくかに思考が巡らせていく。もちろん、書籍に記載されている観点の全てを曲中でうまく活用することはまだ到底できないが、観点の獲得と、それを実際の曲の中で活用してみようとする意識は絶えず持っておきたい。

あと三十分ほどしたら、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがある。ミーティングに向けた準備はすでに昨日の段階で完了しているため、ワードファイルに書き留めておいた本日のアジェンダを再度確認しておこうと思う。ミーティングが終われば、その流れで昼食前の作曲実践を行いたい。その際には、ベートーヴェンの曲に範を求めようと思う。

どの曲を参考にしようとするかはすでに決めており、その制作年を見ると、それはベートーヴェンが39歳の時に作ったものだということがわかった。そのあたりの時期は、ベートーヴェンの耳の病気が発覚してから随分と時間が経ち、それが悪化の方向に向かっているような頃ではないかと思う。近々ベートーヴェンが書き残した手紙が収められた書籍“Beethoven’s Letters (1972)”を読み返し、ベートーヴェンの人生史と照らし合わせながら作曲実践を行いたいと思う。

一人一人の作曲家の生涯を辿り、彼らの思想を理解することに努めていきたい。それと歩調を合わせるように、彼らが残した曲を参考に曲を作っていく。おそらくそうしたあり方と実践が、他者と共に発達することなのだろう。

昼食前にベートーヴェンの曲を参考にするには、久しぶりに突然転調を試してみたいと思う。あるいは、普段転調する時よりも少し遠い調へ転調させることを試してみたい。その際に意識することは、突然転調を試す場合であれば、それが効果的な響きを生み出す条件を探り、遠隔調への転調を試す場合であれば、転調前後のつながりをなめらかにすることを意識したい。また、曲のテンポや拍子を変えるとどのような変化が曲にもたらされるのかについても観点として持つておく。

音楽は人間の発達と同様に、時間と密接に関係しあったものであるがゆえに、テンポや拍子に関する探究をしていくことは重要だろう。時間に関する諸々の哲学書を紐解こうとしている自分がいるのはこうした事情にもよる。フローニンゲン:2019/2/22(金)09:48

3869. 今頃気づく諸々の事柄

時刻は午後の九時半を迎えた。いつもはそろそろ就寝に向けた準備をするところだが、今日は最後に日記を書き留めておきたい。

今日の夕方に、街の中心部に散歩がてら買い物に出かけた。フローニンゲンの中心部はいつもと同じように賑やかで、特に市場はいつ訪れてもその活気からエネルギーをもらうことができる。

何気なく、市場で売られているものを見るのは一つの楽しみであり、特に何かを買うわけではないのだが、そこで売られている野菜や果物、魚や肉類などを見ていると、生活の香りがして、生きている実感が増すから不思議である。

長らく使っていた香水が切れかかっていたので、久しぶりに香水を購入するために、時折立ち寄る化粧品屋に足を運んだ。この化粧品屋は、和を感じさせてくれる商品が置かれており、一つ一つの原材料にこだわりがあるようなので気に入っている。香水を購入してから行きつけのチーズ屋に立ち寄り、いつものように、チーズとナッツ類を購入した。自宅に帰って、先ほど購入した香水とその他の品の値段が記されたレシートを見た時、消費税の税率に目がいった。

私はもう三年間もオランダで生活をしているのだが、これまでオランダの消費税を気にすることはなかった。しかしレシートを見た時に、目に飛び込んできた税率は21%であり、それはかなり高いと思えた。どうやら化粧品類などの消費税は、オランダでは21%のようだ。比較として今日の昼食前に訪れたスーパーのレシートも偶然手元にあったので確認してみると、食料品に関しては9%であった。

これも幾分高いかもしれないと思って、毎回使っている買い物の袋の底に置いたままにしていたその他のレシートを見てみると、中には6%のものもあった。おかしいなと思って日付を確認してみると、どうやら、食料品に関しては、2018年においては消費税が6%だったのが、2019年においては9%になっていることがわかった。2019年になって二ヶ月が経ち、私はようやくそれに気づいた。ニュースも新聞も読まない生活をここ10年以上続けているため、こうしたことが日常時折起こる。それはそれで一つの楽しみでもある。

そこからふと、今から四年前に、アメリカでの四年間の生活を終えて、日本で一年間ほど生活していた時のある出来事を思い出した。ある日銀座のメガネ屋に足を運び、メガネを購入した際に、日本の消費税が8%になっていて驚いたことがある。メガネを購入した際に、「消費税って8%でしたっけ？」と思わず店員の方に確認をしてしまったことを覚えている。

オランダにやってきて、フローニンゲン大学でダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスに関するコースを履修している際に、「SMAP」という分析手法が取り上げられたことがある。それについて自宅で調べてみたときに、日本のアイドルグループのSMAPが解散していることを知った。そのようなことを懐かしく覚えている。今のところ、日本について私が認識していることは、今年で平成が最後だということ、来年に東京でオリンピックがあること、2025年に大阪万博があることぐらいは知っ

ている。仮に今年の夏に日本で一、二ヶ月ほど生活をするのであれば、その他の細かな変化について皮膚感覚をもって知りたいと思う。フローニンゲン:2019/2/22(金)22:04

3870. 暗号通貨に関する夢

時刻は午前七時半を迎えた。今朝はゆっくと、七時あたりに起床した。

今日から二月最後の週末が始まる。早いもので、来週の金曜日からは三月を迎える。来週の木曜日からパリに滞在することを考えると、パリで三月を迎えることになりそうだ。

外はすでに薄明るくなっている。ただし今日は、幾分霧がかかっている。昨日は一日を通して曇りがちだったので、今日はこれから少しずつ晴れ間が顔を覗かせることを期待する。今、一羽の大きな鳥が、辺りに響き渡る鳴き声を上げながら飛び去っていった。

一日の活動を本格的に始める前に、今日もまずは、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、ある国の国境付近にいた。そこにはベルリンの壁を彷彿とさせるような壁がそびえ立っており、二つの国を区切っている。私はその壁に向かって散歩していた。壁の前までやってくると、二人の外国人の夫婦の姿が見えた。

二人の夫婦に近寄り、私は二人に挨拶をした。二人とも中年であり、人生の様々な経験を経ていることが外見からなんとなくわかった。二人と会話をしていると、小中高時代の女性友達(NI)が現れ、私たちの話に加わった。話が盛り上がってきたところで、夫人の方がふと、「ある暗号通貨を一定数以上保有していると、壁の向こうに行けないのよ」と述べた。

夫人がそのように述べたとき、一台の列車が壁の向こう側の線路をゆっくと走り、徐々に速度を落としている姿が見えた。私は夫人にその暗号通貨が何なのかを確認すると、まさに私が保有しているもののうちの一つだった。その通貨を保有していると本当に壁の向こうに行けないのかが私になり、それを確かめてみたいと思った。先ほど夫人は、その通貨を一定数以上保有していると、壁の向こう側に行けないと幾分嫌味を込めて述べていた。二人の夫婦も以前その通貨を保有していたのだが、何か損失を被った経験があるのだと私は察した。私の横にいた友人もまたそうした経験があるようだった。

そこで私は、あえて自分がその通貨を保有している旨を伝えた。すると、夫人は「いつからその通貨を保有しているの？」と尋ねた。それに対して私は、「世間が注目するよりもずっと前から」と述べた。それを述べたとき、私以外の三人の目の色が変わった。特に私が具体的な購入日を述べたとき、三人は何かを悟ったようだった。彼らの表情を見た瞬間、私も何かを悟った。市場で大きな買い注文を私が入れたところによって、相場が激しく動き始め、彼ら三人は大きな損失を被ったのだとわかったのである。

私の友人が、「あのときの・・・」と述べた瞬間、私は三人に身柄を拘束されてしまうと思い、宙に浮かんだ。案の定、三人はやはり私の買い注文によって乱れた相場によって大きな損失を被っており、私を捕まえようとしてきた。私は彼らに捕まらないように空を飛んで、その場から逃げることにした。すると、もう自分は壁の向こう側にいた。

今朝方はそのような夢を見ていた。久しぶりに暗号通貨に関する夢を見たように思う。私が暗号通貨に関する夢を見るたびに、市場が活発に動いている傾向にあるため、久しぶりに今から少しばかり、現在の市場の状況を確認したいと思う。フローニンゲン:2019/2/23(土)07:59

No.1711: A Tender Night Breeze

A tender night breeze that makes me feel spring is blowing at this moment. Groningen, 19:56, Saturday, 2/23/2019

3871. 夢の続き:言葉に内包されるもの

時刻は午前八時を迎えた。これから一日の活動を本格的に始めていきたい。

今日は昼食後に、一件ほどオンラインミーティングがある。それ以外は特に仕事もないため、今日もまた作曲実践に力を注いで行こうと思う。実践に並行して、ハーモニーやフーガに関する専門書を読み進めていきたい。

先ほど今朝方の夢について振り返っていた。そういえば、もう一つ断片的な夢を見ていたことを覚えていて。私は欧州のどこかの国にいて、列車に乗っていた。それは一般的な列車というよりも、食堂などが付いた特別な列車であった。

私はしばらく座席に腰かけながら、窓の外の景色を眺めていた。すると、私の後ろの席から日本語が聞こえてきたため、振り返ってみると、私の友人であった。彼はビールを購入したいと述べており、私は一つ前の車両に自動販売機があることを伝えた。ちょうど私も喉が渴いていたので、彼と一緒に自販機のある車両に向かった。

自販機の前に到着すると、そこで売られているビールの値段は、どれも360円であった。私は普段ビールを飲まないのに価格については疎いが、なぜだか私は、ビール一本の値段は本来340円ほどだろうと思っていた。友人は、「少し高いけど、まあしょうがない」と述べながら、一本ほどビールを購入した。そこで夢の場面が変わった。

この夢について振り返ってみると、確かにその列車は欧州のどこかの国を走っていたのだが、自動販売機があるということ、そしてそこで売られている飲み物の値段が円表示になっていたことが興味深い。欧州と日本が混ざり合っているかのような感覚を受ける。これはもしかすると、この三年間での欧州生活を通して、自分の深層意識の中に、欧州独特の感覚が流れ込み、それが日本的なものとの融合し始めていることを示しているのかもしれない。そのようなことを思わせてくれる夢だった。

昨夜就寝前に、改めてこの三年間をフローニンゲンという町で過ごすことができたことに感謝の念を捧げていた。フローニンゲンで過ごすことによって見えてきた自己の新たな側面や、フローニンゲンによって育まれた自己の側面を一つ一つ振り返っていた。またそうした事柄以上に、そもそも私は、「感謝」という言葉が存在していることそのものに感謝をしたいと思ったのである。そこから私は、自分の内側にある日本語や英語を一つ一つ取り出しながら、それぞれの言葉に内包されている質感とエネルギーを感じていた。

一つ一つの言葉が持つ色、形、味、触り心地などに加えて、それぞれの言葉が持つエネルギーのようなものを感じている自分がそこにいた。そして、言葉一つ一つの感覚質とエネルギーは、その言葉を用いてきた過去数千年にわたる人たちの歴史が堆積したものであるという気づきも得ていた。言葉が持つ呪術的な力の正体は、人間の文明の堆積だと言えるかもしれない。一つ一つの言葉には、間違いなく集合的に堆積されてきたものが色濃く反映されている。昨夜はそのようなことを思いながら就寝に向かっていた。フローニンゲン:2019/2/23(土)08:27

A light breeze in the early morning is blowing through Groningen. Groningen, 09:05, Sunday,
2/24/2019

3872. 進歩・発達の運動性: 身体意識の涵養

時刻は午後四時を迎えた。午後の活動もひと段落したので、これから散歩に出かけたい。近所の河川敷のサイクリングロードをゆっくりと散歩し、帰りに近所のスーパーに立ち寄ろうと思う。今日は早朝に霧が出ていたが、午前中から今にかけて、めっきり良い天気である。

春を感じさせる太陽の光が燦然と地上に降り注いでいる。そうした様子を眺めていると、自分の内側にエネルギーの塊の脈動が感じられるかのようだ。

これから散歩に出かける際には、ここ最近注目している建設中の建物をゆっくり眺めたい。また、街路樹のつぼみの様子も忘れずに観察する。それらを観察する際に、変化を捉えることができなかつたとしても、確実に起こっている変化の脈動を感じるようにしたい。人間の発達においても同様であり、発達とはそれが起こった後に振り返ってみて初めて気づくような特徴を持っているが、発達の最中であって感じられることも少なからずある。

内面の成熟のみならず、作曲技術の進歩においても、目に見えるような進歩がなかったとしても、絶えず行なわれている進歩に向けた運動に着目したい。森羅万象に宿るこの運動性には本当に驚かされる。

このところは天気の良いこともあり、基本的に毎日ウォーキング兼ランニングに出かけている。それによって全身の血の巡り、及びエネルギー循環が促進されている。

自分の言葉と音を創出し続けていくことが一つのライフワークとなっているが、それを行うためには、とにかく身体の状態を整えることが重要だ。自らの言葉を育み、それを生み出すために読書をする際にも、そして実際に言葉を生み出すためにも、身体の状態がどのようなものであるかがカギを握る。さらに言えば、言葉や音を生み出すためには、身体意識を鍛錬していくことが不可欠であり、そうした観点から見れば、運動神経が鈍いというのは、そうした活動の大きな妨げになってしまう。ここ

で述べている運動神経というのは、スポーツが上手くできるとかそういう話ではなく、自らの活動領域における身体意識のことを指す。

一見すると、ある知性領域において秀でてるように思える人に関して、実際にその人の言葉の使用法を観察してみると、実はそれが単に頭だけで行われているものであり、全身運動的なものが欠けているように思えることは多々あるのではないかと思う。

通称、「頭でっかち」と呼ばれるような人は、この問題に陥ってしまっているのではないかと思う。そうした症状を持つ人たちの言葉には、全身運動がもたらす肉感のようなものが欠落しており、言葉だけが積み重なっている印象を私たちに与える。そうした症状に陥らないためにも、日々の実践においてはとりわけ身体意識の涵養を意識し、全身運動を通じた探究活動と創造活動を心がける。それではこれから散歩に出かけることにしたい。フローニンゲン:2019/2/23(土) 16:22

No.1713: A Spring Coronation

Today is a warm and cheerful Sunday which makes me expect the beginning of a spring coronation. Groningen, 14:25, Sunday, 2/24/2019

3873. パリとの再会の日に向けて

つい先ほど散歩から戻ってきた。このように天気の良い日に散歩に出かけること、そして何より今日のように休日の雰囲気を感じながら散歩することの喜びを改めて噛み締める。

今日はこれから、ラヴェルに範を求めて作曲実践をする。参考にしようとしている曲は、構造的にそれほど複雑ではない。一つ一つの和音を意図を持って構築していき、曲全体の響きを豊かなものにしていきたいと思う。作曲実践の途中で入浴の時間がやってくるかもしれないため、続きに関しては、入浴し、夕食を摂り終えた後に完成させたいと思う。

二年半ぶりにパリに足を運ぶ日が迫ってきた。来週の木曜日からぶらりとパリに足を伸ばそうと思っており、先日天気予報を確認したところ、その日はフローニンゲンで小雨が降るようだった。しかし本日再度確認してみると、その日は晴れとのことであり、嬉しく思う。パリに滞在中は、一日ほど小雨に見舞われるようだが、それ以外の日は晴れのようなのでとても有り難い。

パリはフローニンゲンよりも暖かく、パリではより春を感じることができるだろう。パリの滞在に向けて、今日は夜にでも、ホテルの予約を済ませておきたい。二年半前に宿泊したホテルは、今回の旅行のメインでもある国立ピカソ美術館から近いため、今回も同じホテルに宿泊しようと思う。二年半前は、ちょうどリオ五輪が開催中であり、ルーブル美術館を訪れる前日かその日に、五輪サッカーの決勝戦があったことを覚えている。

今回の旅行の滞在先はパリ一箇所であり、ホテルを予約し、あとは列車の予約をすれば十分だ。当日は午前十時半あたりにフローニンゲンを出発する列車に乗り、スキポール空港で一回ほど乗り換え、パリには午後四時半あたりに到着することができる。昼食はフローニンゲンの駅で購入し、スキポール空港までの間に昼食を食べることになるだろう。

パリに到着したその日はホテルに直行し、近所のスーパーに行き、その辺りを散策するようにしたい。散策と言っても、二年半前に同じ場所を訪れており、当時の記憶がまだありありと残っているので、目新しいことはないと思うのだが、この二年半の生活を通じて実現された感覚の変容を確かめることができればと思う。すでに見慣れた景色であったとしても、自分の内側に変容が起こっていれば、その景色から受け取るものも変わるのであるから、今回のパリ滞在では、それを感じることができればと思う。

滞在二日目は、計画通りに、まずはパリ郊外にあるラヴェル博物館に足を運びたい。ここは実際にラヴェルが住んでいた家を公開したものであり、ラヴェルがどのような生活環境の中で作曲に打ち込んでいたのか、特に周辺環境がいかような創造的靈感をラヴェルにもたらしていたのかを実感できればと思う。その日はラヴェル博物館以外に訪れる場所はなく、その周辺を散策し、多くの時間をラヴェルが生きた場所で過ごすことにしたい。

滞在三日目は、ドビュッシー博物館に足を運ぶ。こちらもパリの市内からは少し離れているが、滞在予定のホテルからは列車でそれほど遠くない距離にある。その日もドビュッシー博物館を訪れることしか予定を入れておらず、日曜日は午後からしか博物館が開いていないようなので、午前中はパリ市内の楽譜専門店巡りをしようと思う。特に、フランスの作曲家でまだ馴染みのない作曲家の楽譜を購入することができれば幸いだ。あるいは、フランスの作曲家にこだわらず、何か自分を惹きつける作曲家の楽譜と出会えば、それらは全て購入しておこうと思う。

滞在四日目は、ホテルからほど近い、国立ピカソ美術館に足を箱ぶ。そもそも今回パリに足を運ぼうと思ったのは、以前ピカソについて調べている時に、この美術館の存在を知ったことによる。この日は、本当に時間をかけて、この美術館の作品をゆっくり堪能しようと思う。パリとの再会の日が近づき、いかような再会を果たすのかに対する期待が少しずつ膨らんでいく。フローニンゲン:2019/2/23(土)17:38

3874. 固有の体験とそれを綴ること

今朝は六時過ぎに起床した。時刻は七時を迎えようとしており、この時間帯は、もう空がダークブルーに変わり始めている。日の出の時間もそうだが、日が沈む時間も随分と変化が見られる。それらは共に春の到来を予感させる。

昨日の入浴前に見た夕暮れ時の空がとても美しかったことを思い出す。様々な色が淡い光を発していた。今日も天気が良いようなので、同じような夕焼けを見ることができのかもしれない。ただし、「私たちは二度と同じ川に入ることができない」という言葉にあるように、昨日見た夕焼けは唯一無二のものであり、今日の夕焼けもそうしたものになるだろう。それを意識しながら、今日の夕焼けを味わうことができたらと思う。

いつもと同じように、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、大学時代のゼミの友人(TA)と話をしていた。現実世界においては、彼はコロンビア大学の大学院に留学をしていたのだが、夢の中の彼はスイスに留学をしていた。話の話題として挙がっていたのは、彼がスイス留学に向けての準備をしている際に書いていたブログについてであった。

私は彼のブログを時折読んでおり、その内容を楽しんでいた旨を伝えた。だが一つ残念だったのは、彼がスイスに留学して以降は、パタリと更新が止まってしまったことである。その点についても彼に伝えると、彼自身もブログを続けることができなかつたことを残念がっているようだった。彼にとってはその時の留学が初めてであり、大学院での勉強と新しい国での生活に手いっぱいであり、ブログを書く余裕がなかつたそうである。

その話を聞きながら、そういえば私も、初めて留学した時は、日本語で何か文章を書こうとするような意欲が減退し、新たな地に何とか適応しようとすることで精一杯だったことを思い出した。そうしたことから、彼がブログを継続することができなかったことを批判することはできず、事情はよく理解できた。しかしとはいえ、彼がスイスでどのような学びを得ているのかという一次情報は極めて貴重だと私は思っており、その点についても彼に伝えた。

世間では、実際に自ら経験したことを自分の言葉で表現するのではなく、二次情報や三次情報を単に紹介するようなことばかりが行なわれている傾向にあるため、彼のスイスでの体験を彼の言葉で語ることはなおさら貴重だと思った。

彼と会話をしていると、「これからファイナンスのクラスがある」と彼は述べた。私はそのクラスに関心があったので、聴講させてもらうことにした。

教室には、すでにスイス人の教授が教壇に立っており、大学院生の姿もちらほら見えた。私は学部時代にファイナンスのクラスをよく履修していたため、そこで話されていることが懐かしく、同時に当時あまり理解できなかったトピックや、大学院レベルのより応用的なトピックに触れる機会を得られたことは喜ばしかった。

今朝方はそのような夢を見ていた。夢の中で、彼が「自らの人生を綴ること」を途中でやめてしまったのは残念であった。夢の中の私は、自らの人生を綴り、人生そのものを深めていくことの大切さを彼に伝えようとしており、実際に現実世界で同じような場面に出くわしたら、同じことを伝えるだろう。また、夢の中で彼がスイスで体験していること、考えていること、感じていることほど大切な情報源はなく、そうした一次情報としての経験こそが、その人をその人たらしめているものなのだと思う。そして、それを自らの言葉で綴ることが、固有の自己の発見と、書くという行為を通じて、究極的な主観性を超えて、それが客観的・普遍的なものに昇華されていくのだと思う。

夢から覚めて改めて思うのは、自分を自分たらしめている固有の体験と、それを自らの言葉で綴っていくことがいかに大切かということである。さらには、そうした行為が普遍的なものに至るという点も忘れてはならないことだと思う。フローニンゲン:2019/2/24(日)07:17

It is fine weather today, too. Flowers are starting to dress themselves for spring. Groningen,
07:54, Monday, 2/25/2019

3875. パリ小旅行計画

時刻は午前七時半に近づきつつある。今、白いカモメたちが、早朝の淡い空の下を優雅に舞っている姿が見える。彼らの目的や意思が何なのかはわからないが、とにかく優雅に空を旋回している。

今この瞬間の空を見る限り、今日は雲がほとんどなく、良い天気になることが予想される。近くの空はライトブルーに変わっており、遠くの空はピンクがかっている。また、そうした空の上に半月が輝いている姿も美しい。そのような光景を眺めながら、昨夜、春を感じさせてくれる柔らかな夜風が吹いていたことを思い出した。春の足音を様々な現象から聞き取ることができる。

昨日の夜に、来週の木曜日からのパリ旅行に関する各種予約を済ませた。それは大変ではなく、ホテルと列車のチケットを予約するだけであった。当初は、二年半前にパリに訪れた時に宿泊したホテルに滞在しようと思ったが、今回スキポール空港駅からパリ市内の主要な駅である「パリ北駅」に列車で移動し、その駅を滞在中によく利用することを考えると、この駅周辺のホテルに滞在するのが便利だと思った。そのため、パリ北駅近くにある数多くのホテルのうち、広々とした勉強机があり、バスタブもきちんとある清潔そうなホテルを見つけ出し、そこを予約した。

そもそもパリ北駅は、フランス国内のさまざまな場所に向かう列車が運行されているだけではなく、ロンドンとの間を結ぶユーロスターや、ブリュッセルやアムステルダム中央駅、さらにはケルン中央駅に行ける高速列車も運行されている。二年半前にパリに訪れた時は、フローニンゲンから向かったのではなく、スイスのニューシャテルからパリに向かった。その時には、おそらくこの駅で降りていないと思うため、今回この駅で降りた時には、駅舎の外観をじっくり眺めようと思う。

今回のパリ小旅行では、パリ市内の楽譜専門店で行くつか楽譜を購入しようと思っているため、持参する書籍は最小限にしたい。もしかすると、書籍を持っていく必要はなく、去年の年末に作った

作曲理論のまとめのノートを持っていくのが良いかもしれないと思っている。この旅行中に、繰り返しまとめノートを読み込んでいくことは有益だろう。

パリに滞在するホテルに関しては、数日前に計画していた場所と違うところにしたが、滞在中の訪問先については変更はない。一日に一箇所だけ足を運びたいと思う場所に行き、その他の時間は散策の時間に充てる。

滞在中の朝食は、近所のスーパーで購入した果物類と、ホテル近くのパン屋で購入したパンとコーヒーになるだろう。昼食に関しては、その日に訪れるメインの訪問先に近いレストランで食事をし、夕食は、ホテル近くのタイ料理屋に通うことになるだろう。そのような計画を立てている。フローニンゲン:2019/2/24(日)07:41

No.1715: A Ceaseless Movement for Creation

A ceaseless movement for creation is always occurring within us. Groningen, 11:52, Monday, 2/25/2019

3876. 大伽藍の建設に向けて

自分が毎日短い日記を書き、短い曲を作っているのは、その日一日を大切にしたいという思いと、その日の今という瞬間に掴まれる感覚を大切にしたいからなのだろう。

欧州での生活を経て、遅まきながら、ようやく自分の特性というものが明確に自覚されるようになった。私は、長大な時間をかけて一つの創造物を生み出すというよりも、日々小さく一つ一つの完結した創造物を生み出し、その実践を長きにわたって続けていくことによって、結果としてそれらの創造物を巨大な建造物に仕立てていくことの方が向いているのだと思わされる。

とにかく小さな創造物を生み出し続けていくこと。それを積み重ねていくことによって、いつか言葉と音の大伽藍が出来上がっていることに、自分の死後気づければ幸いである。その大伽藍には、自分の実存性と主観性が滲み出ているようにしたい。そして、創造行為を通じて、それら実存性と主観性が普遍的な性質を帯びているようになればと思う。これから行う作曲実践も、今日の学習も、そこに向けた貴重な一歩になるだろう。

時刻は午前八時を過ぎ、辺りはすっかり明るくなった。今、朝日が美しく地上に降り注いでいる。空には、まだ半月の姿が見える。

今日もまた天気がとても良いようなので、午後からは散歩に出かけたい。今日はいつもより歩く距離を伸ばしてもいいかもしれない。そんなことを思わせてくれる朝だ。

他者の活動に対して過剰に批判する人をよく見かけるが、彼らのそうした反応もまた、自我の自己防衛反応の一種なのだろう。他者の活動が何らかの領域で卓越しているように見えると、自分が貶められているように感じるのだろう。仮にそうした人たちから批判を受けたとしても、彼らの反応を気に留めないことが重要だろう。発達に必要な健全な自己批判は、自らなせばいいのである。

他者の反応や批判に右往左往するのではなく、パスカルが述べたように、「自発的な全き自己放棄」の精神で生きることが肝要だ。健全な自己批判を絶えず行いながら、それすらにも囚われない境地で生きていくこと。自己を明け渡すためには、まずは自我の狡猾な特性に気づき、それらに囚われないようにしていくことが最初のステップになるだろう。そこからは、自我の防衛反応を緩めていき、自我がくつろぎ、溶解していくように手はずを整えていく必要がある。

今日はこれから作曲実践を行い、その後、協働プロジェクトに関する分析作業に取り掛かりたいと思う。来週は協働関係のミーティングは一件ほどしかない。来週の木曜日からパリに旅行に出かけていくこともあり、そのように調整をしたのだが、それにしても来週はゆとりがある。そのミーティングに向けて、今日と明日を使って、分析作業を完了させたいと思う。この分析作業に午前と午後に分けて従事していきたい。それと並行して、作曲実践と少々の読書を行っていく。フローニンゲン：
2019/2/24(日)08:13

No.1716: Dulcet Late Winter

The sweetness of late winter exudes and presages spring. Groningen, 18:18, Monday, 2/25/2019

3877. 敬虔に生きること

時刻は午後の四時半を迎えた。今日は本当に、平穏かつ平和な日曜日である。その平穏さと平和さの中に溶け出してしまいそうな感覚がある。

つい先ほどまで、近所の河川敷に散歩に出かけていた。今日はいつもより距離を伸ばし、最初はランニングを軽く行い、それ以降は基本的にウォーキングを楽しんだ。今日は日曜日ということもあり、いつも以上に柔らかな雰囲気になりが包まれていた。それはもちろん、今もまだ継続している。

サイクリングロードを歩きながら、春の戴冠式がもうしばらくしたら始まるという予感を改めて持った。春は本当にあと少しだ。

今日は昼食を摂っている最中に、食卓の窓から、自宅の目の前の空き地を眺めると、そこに紫色と黄色の美しい花が咲いていることを発見した。確か先週までは、それらを見ることができなかつたため、ここ最近開花したのだと思う。新たに咲き誇る花々を見ていると、自然の運行を見て取ることができる。

今年の今頃から、今日にかけて、自分はどのような変化を遂げてきたのだろうか。そうした問いを自然の運行は投げかけてくれる。おそらく、私もこの一年間で何かしらの変化を遂げたのだと思う。それはとても小さなものかもしれないが、確かに自分の中で何かが変わったのだという実感はある。それが何かについては、今後より明らかになってくるだろう。

自然と自己の双方の変化を見落とさずに生きること。そうした変化に寄り添いながら日々を生きていくことが、敬虔に生きることなのかもしれない。そうであれば、今日という日を敬虔に生きていたことになる。こうした日々をこれからも積み重ねていく。そして、自分が生きた今日という一日を、言葉と音の形にしていく。それは、ある一人の固有の人間が確かに生きた証となる。それ以上でも、それ以下でもない。生きた証を残すことが重要なのではなく、証を残すことによって確かに生きることが何よりも重要なのだろう。生きた証というのは、真に生きたことによって生まれる産物にすぎない。それを忘れないようにする。

今、書斎の中では、スクリヤービンのピアノ曲が流れている。やはり、スクリヤービンのピアノ曲には惹きつけられるものがある。昨日から改めて、スクリヤービンのピアノ全集を聴いている。ここからしばらくはそれを聴き続けることになるかもしれない。

先ほど散歩をしている時に、全身のエネルギーの循環が良くなったためか、静寂な意識状態の最中であって、いろいろと気づきが芽生えていた。それらについては、明確な言葉の形になるのをもう

少し待っておこうと思う。言葉、あるいは音になるための、温める時間を設けたい。こうした時間もまた、大切なゆとりの時間となる。私たちの内面は、このようにして、熟成する時間的ゆとりを与えることによってゆっくりと成熟していく。フローニンゲン:2019/2/24(日)16:57

3878. 今朝方の夢の断片

今朝は六時前に起床し、六時半を迎えた頃に一日の活動を始めた。つい今しがた、小鳥が高らかに鳴き声を上げた。今もまだ、別の小鳥が小さく鳴いている。

今日から新しい週を迎えた。早いもので、今週中に二月が終わり、三月が始まる。外側の時間は早く流れていく一方で、自分の内側の時間の流れは緩やかだ。内と外の時間の流れの差に気づきながら、外側の時間の流れに騙されない形で日々を過ごしていこうと思う。

いつもの通り、今朝方の夢について振り返っておきたい。だが今日は珍しく、夢についてそれほど覚えていない。そのため、覚えている場面を書きながら、輪郭を整え、ゆっくりと夢の内容を思い出していきたい。

夢の中で私は、ある場所で、小中高時代から付き合いのある幼馴染(SI)と話をしていた。そこは日本とも外国とも判断できないような場所であった。特に深刻な話題について話をしていたわけではなく、とてもたわいの無いことを彼と話していたように思う。私たちが話をしているところに、二人の芸能人が現れた。

二人とも、芸能界では大御所の方であり、まさかこのような場所で会って話をすることになるとは思わなかった。私は二人とは初対面であったが、どこか昔から付き合いのあるような親近感を二人に対して感じており、会話はとても自然であった。どのような話からそのようになったのかわからないが、二人は突然服を脱ぎ始め、自らの体を披露した。二人の体を見たとき、年齢の割に随分と立派な体であることに驚いた。

今朝方の夢に関して覚えているのはそれぐらいしかない。他にも細かな描写があったと思うが、それらはすでに記憶の彼方に去っている。今朝方は未明に目覚めたときがあり、そのときには別の夢を見ており、その夢の内容が滑稽なものであったことを覚えている。目覚めた時も、思わず笑いが

込み上げてしまうような内容の夢だった。今朝方の夢についてその他に思い出すことができれば、その際にはまた書き留めておきたい。

今週の木曜日からパリへの小旅行が始まる。今週は、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングが一件しかないため、自らの探究活動と創造活動に多くの時間を充てることができるだろう。

今日もまた、作曲実践を核に据えて、音楽理論に関する書籍を少々読み、一昨日から読み進めている、森有正先生の日記を読んでいこうと思う。午前中に、水曜日に行われるミーティングに向けた資料のレビューを行い、レビュー済みの資料を協働者の方に送ろうと思う。それ以外に今日行う必要のあることはなく、午後はいつものように、近所の河川敷のサイクリングロードに散歩に出かけた。今日も自らの取り組みをゆっくりと前に進めていく。フローニンゲン:2019/2/25(月)06:52

3879. 自発的な形象化運動

時刻は午前十時を迎えた。スクリャービンの優しいピアノ曲が書斎の中を流れている。

今日も晴天であり、平穏な一日がゆっくりと進行している。それは本当に緩やかに流れており、日常の事物全てが一つの川のように絶え間なく流れているのがわかる。

晴れ渡る空を眺めていると、心がますます穏やかなものになっていく。ふと窓の外を見ると、草花が春に向けて身支度をしているように見え、大変微笑ましかった。

起床直後に、今朝方の夢について覚えている範囲のことを書き留めていたが、それはあまり分量がなかった。その後、夢について幾分思い出すかと思ったが、それは期待外れに終わった。だが、早朝にごくわずかであっても夢を書き留めておいたことに意味があるのだと思う。夢の中に現れていた一つ一つの感覚や情景を大切にしたい。それは意味の宝庫である。そうした意味の宝庫に言葉を与えることは、即それらに居場所を与えることでもある。

また、それらに言葉を与えることによって、それらは自分の内側に位置付けられていく。自分の内側から生じた事柄に言葉を与え、それを自分の内側に再定義し直していくこと。おそらくそれは、発達の要諦の一つなのだろう。

内的感覚に言葉を与えていくという実践は、もはや呼吸を行うかのようなものになった。呼吸のように自発的にそれがなされていく。呼吸というのはするものではなく、起こるものなのだ。内的感覚を形にしていくことは、私がそれをしようとしているというよりも、それが自発的に起こっていると述べることができる。

そして、こうした自発性は、発達の本質である。ここに、呼吸としての形象化実践と自らの発達が相互に関係合っている様子を見て取ることができる。自分にできることは、そうした自発的な形象化の運動に抗うことではなく、それに身を任せ、絶えず言葉や音楽としての形を生み出していくことなのだろう。

先ほどふと、内側の音楽が聴こえてくるかのような日記を綴り、内側の言葉が滲み出してくるかのような曲を作っていくことに向けて、気持ちを新たにした。音楽と言葉、言葉と音楽。それらは双方不可分な関係を結んでおり、互いに影響し合っている。

日記に音楽的なものを含めようとするような作為や、音楽に言葉を含めようとする作為は失敗に終わるだろう。そうではなく、音楽と言葉が自発的に影響を与え合い、それが自然な形で表に出てくることを見守りさえすればいいように思えてくる。その実現に向けては、内側の形象化運動に忠実に従ってみるというのが方法としては良さそうだ。

これらから、昼食前の作曲実践を行う。その際には、ラヴェルに範を求めようと思う。

今週の木曜日から始まるパリ小旅行において、誰の楽譜を持っていくかは悩ましい。それはもちろん、嬉しい悩みなのだが、さて誰の楽譜を持っていくのが今の自分にとって望ましいのだろうか。

パリ市内の楽譜専門店で何かしらの楽譜を購入することになるだろうから、フローニンゲンから持参するのは一冊でいいだろう。最初候補に挙がっていたのは、モーツァルトの小作品集であるが、今改めて手持ちのラヴェルの楽譜を眺めると、この楽譜を持参することがふさわしいように思えてくる。

滞在先のホテルで、朝と夜の短い時間を使って作曲をする際には、複雑な曲に範を求めることはあまり好ましくないだろう。そうした観点で考えてみても、二冊あるラヴェルの楽譜のうちのこちらの一

冊は、今回の旅の友にふさわしいように思えてきた。とりあえずは、この楽譜を第一候補としたい。

フローニンゲン:2019/2/25(月)10:23

3880. 自分自身を読み解くことと書くこと

先ほどふと、人を白痴化させる現代の種々の道具と仕組みと距離を置き、それらに左右されない形で、自分の取り組みに従事し続けていくことの大切さについて考えていた。人間を白痴化させるツールに関して挙げればきりがなく、テレビに始まり、現代においては動画サービスやソーシャルメディアに至り、本当に無数のものが存在する。そのようなツールを活用しながら無為に人生を過ごしたくないと改めて思う。人間を貶めるそうした道具、さらには白痴化を促す社会的な思想と仕組みには気をつけなければならない。

今日は本当に天気がいい。一切風が吹いておらず、裸の街路樹が堂々と立っている。「裸の街路樹」と述べたが、ここ最近散歩をしながら発見していたように、もしかするとここからは見えないだけであって、実際にはそれらの木々にはつぼみが付いているかもしれない。今日も午後に散歩に出かける予定なので、その際にはまた木々の観察を行いたい。

書を読むことについて改めて考えてみると、書を読むというのは結局のところ、自分自身を読み解いていくことだと言えるかもしれない。正直なところ、他者の言葉を額面通りに受け取ったり、その言葉の意味を他者の視点のまま詮索しても何ら意味はないのではないかと思う。

書物を読むことによって真に自己を深めていくためには、書を読みながら、徹底的に自己を読み解いていくことが不可欠である。それを行って初めて、自分の内側から何かが開かれていくのだと思う。書物に書かれた内容は、とにかく自分に引き付けて読む必要がある。極論をすれば、自分の関心のある事柄だけ、自分を惹きつける事柄だけに絞って書物を読む必要がある。そうでないものを読んだところで、それは私たちに真に深めてはくれないのだから。むしろ、そのような形で行った読書は、単に死物と化した知識を増やすだけである。

それを増やすために読書に従事している人がいかに多いことか。自らに引き付けてなされない読書、そして自己を読み解くことが含まれない読書によって得られる知識は、実用に足ることはなく、むしろ、私たちの内側にある真実から自己を遠ざけてしまう。

自己を真に深め、しかもこの社会に関与していく際に役に立つ知識というのは、自己を読み解きながらなされる読書とそれに付随した実践行為を通じてしか獲得されえないものなのだろう。そのようなことを考えていると、自己を深めること、社会へ具体的な関与を行うこと、そして読書の三つがそれぞれ不可分の関係を構築していることに気づく。それぞれを決して分けて実践してはならない。それらを絶えず一つの統一的な実践として行っていくこと。それを自らに課していきたいと思う。

今日も相変わらず、自分の内側に生じたことを言葉や音の形にする実践に従事している。言葉に関して言えば、一見すると何の変哲もない日常について日記を書き留めているだけなのだが、そこから思いがけない発見や気づきをもたらされることに改めて驚く。

書くことの恐るべき力を見て取ることができる。書くことは考えることであり、感じることであり、自己を発見することであり、自己を深めることもである。

書くということが何なのか。最近私は、そうした書くことに伴う本質的な何かに関心を持っている。人間にとって書くことはどのような意味を持っているのだろうか。その主題については今後も考えを深めていきたい。

いずれにせよ、私は別に特殊な環境で特殊なことを行っているわけでは決してないのだが、そんな何の変哲もない日常生活の中で、日々文章を綴ることが止めどなく行なわれていることには驚かされる。そして、自分の人生に密着した、日々の生活に密着した文章を書き続ければ書き続けるだけ、自己の新たな側面を見出し、人生に対する新たな意味を見出し、自己及び人生が深まり、そしてそれらが開拓されていく姿には本当に驚かされる。そのような姿を見ると、私たちは自分の人生からしか本質的な学びなど得ようがないことがわかってくる。フローニンゲン:2019/2/25(月)10:46

No.1717: Spring Humming

It seems to me that spring is humming. It induces us to hum a tune. Groningen, 09:36, Tuesday, 2/26/2019